

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00842

研究課題名(和文) 英語を媒介とする授業(EMI)の学習モデル：言語使用、教師、と認知プロセスの研究

研究課題名(英文) Learning processes in English as a Medium Instruction: Language use, teacher identity, and cognitive processes

研究代表者

藤井 彰子 (Fujii, Akiko)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：60365517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1) 英国から2名の研究者を招聘し、EMIに関する2日間のセミナーを実施した。2) 日本のEMI教員を対象に調査およびインタビュー研究を実施し、JACET関東支部大会で発表した。EMIの教育現場での緊急オンライン教育における教師のアイデンティティ、信念、実践についての論文を現在準備中。3) 英語の講義スライドにおけるL1の使用の研究を実施した。データ収集は完了し、現在論文を準備中。尚原稿とも2023年中に国際学術誌に投稿予定である。4) 高校生向けの特別講座を開催し、文学作品を英語で学習するときのエンゲージメントについて調査し、現在論文を準備中。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、非英語圏において英語を媒体とした教育を実施する教育機関が世界規模で爆発的に増えている。教員側、学習者側両方にとって多くの課題があり、理解を深め、課題を解決するためには政策レベルから学習者の認知レベルに至るまで、現場の多様性を踏まえた多くの研究が必要である。本プロジェクトにおいては、このような教育環境で教授する教員に焦点を当て、アイデンティティや信念がどのように実践に影響するかを明らかにすることで、教員の必要なサポート体制などへの示唆が得られる。また、実践面では、英語の講義で補助教材として使用されるスライドについて研究することで、効果的な教授法についての知見に貢献することができる。

研究成果の概要(英文)：In November, 2019, we invited two researchers from the U.K for a two-day seminar which included a symposium and meetings on English Medium Instruction. Second, we conducted a study on faculty perceptions of teaching in an EMI context in Japan based on a survey and interviews. Results were presented at the JACET Kanto Chapter Conference. The manuscript titled "Diversity in teacher identity, beliefs, and practices during emergency online teaching in a multicultural EMI context" is currently under preparation. Third, we conducted a study of the use of the L1 in lecture slides. The study was completed in March, 2023 and the manuscript, titled "Lecture comprehension in the EMI university setting: Translanguaging strategies in L2 lecture slides," is currently under preparation. Both manuscripts will be submitted to an international journal later in 2023. Finally, a workshop series for high school students was conducted to investigate learner engagement in a literature class in English.

研究分野：英語教育

キーワード：EMI teacher identity lecture comprehension engagement

1. 研究開始当初の背景

教科内容 (content) を扱う外国語学習においては、教科内容を題材とするもの (content-based learning)、あるいは教科学習と外国語学習を統合するもの (content and language integrated learning: CLIL) などがあり様々な定義が混在するが、ここで扱う EMI (English medium instruction) は主に高等教育において専門内容の教授が主目的とされている点において、第二言語教育をも目的とする他のアプローチと区別する (Snow & Brinton, 2017)。ただし、EMI において、単純に英語で教授することでは専門内容の学習の質が担保されない。学習者が教授言語を母語としないことに配慮した教授方法を取り入れる必要があることが強調されている (Stillwell, 2017 他)。

だが、EMI に対する社会の要請が高まる一方で、日本国内の事例研究はまだ少ない。日本で EMI を導入している、導入を検討している高等教育機関、中等教育以下の学校にとって有益な研究結果を提供することが期待される。具体的には、第二言語習得、教授法、認知心理学など多角的な視点から EMI の事例を分析することで新しい研究の枠組を提供することが必要であり、また、EMI における様々な要因 (言語使用、教師のアイデンティティ、学習の認知過程など) について理解を深めることで第二言語習得、バイリンガル教育、教師教育、認知心理学など様々な学術分野の発展に貢献することが期待される。従って、本研究の中心的な問いは: EMI においてどのようにしたら持続可能かつ質の高い専門科目の学びを実現できるかである。

2. 研究の目的

本研究は高等教育における英語を媒介とする授業 (English Medium Instruction、以下 EMI) に焦点を当て、学習効果が高く、かつ教員及び大学組織にとって持続可能な教授モデルの提案に貢献することを目的とする。具体的には以下の3つの問いを調査することを目的とした。(1) 言語使用: 授業内外の学習活動において教師は、学習者に英語と日本語でどのようなインプットの機会を提供し、言語と教科内容の学習の機会を創造しているか、(2) 教師のアイデンティティ: 教師のアイデンティティや教授言語や授業方法についての信念や価値感、捉え方、または学習者との関係性がどのように実践に影響しているか、(3) 第二言語での学習 (認知プロセス): 母語と第二言語は学習内容 (概念など) の理解や論理的推論などの認知的学習プロセスや内容へのエンゲージメントにどのように影響するか。

3. 研究の方法

(1) 英語と日本語のインプットについて:

本調査では学習者 35 人を対象に実験を行った。実験の目的は英語での講義の理解と講義スライドにおける日本語使用の関係性を明らかにすることであった。学習者は3つのグループに割り振られ、二つの英語での講義を聴いた。その際にそれぞれのグループには日本語なし、あるいは、タイトルが日本語または用語が日本語、と日本語の使用方法が異なるスライドが提示された。講義終了後に理解度を測定するためのテストを受け、また、数日後に内容の保持を測定するテストを受けた。英語力のテストも受けた。講義の音声とスライドの文字に両方注力することへの認知的な負担についてのアンケートにも回答した。

(2) 教師のアイデンティティについて:

本調査では英語を媒介とする授業を多く開講する日本の大学を事例として取り上げ、英語を媒介とする授業を担当する教員を対象に、困難な点、工夫している点などについてのアンケート調査を実施した。アンケートではることとし、その大学で、英語で授業を担当する教員 90 人のうち、43 人からの回答が得られた。また、インタビューにも応じて良い、という教員 8 名を対象にインタビューも実施した。

(3) 高校生を対象にシリーズで児童文学作品を取り上げ、英語での文学についての課外授業を実施し、その後、小説内容についてのエンゲージメントに関するアンケートを実施した。

4. 研究成果

(1) まだ暫定的な結果ではあるが、本調査で実施した実験結果からは学習者は講義スライドに日本語の記述がある状況が理解を促進したことが明らかであった。しかし、日本語がタイトルに使用された場合と、用語のみ日本語訳が提示された場合とでは有意差は認められなかった。また、英語力が低い学生の方が日本語記述に助けられた。昨今話題になっている *translanguaging* の概念によると、個人の中で使用言語が分かれているわけではないため、個人が持ちうる言語資源を全て使用することが最も効率的である。つまり、日本語も英語も駆使しながら教授内容を理解することが学習面においては効果が高い。本調査の結果はこのような言語観と一致するものであり、講義スライドなどでの日本語の適切な使用が教科学習の定着に役に立つことが示唆された。

(2) アンケートでは英語を媒介とする授業を多く開講する日本の大学を事例として取り上げることとし、その大学で、英語で授業を担当する教員 90 人のうち、43 人からの回答が得られた。アンケートの結果は令和元年度 7 月に国内学会で発表を行なった。英語で専門内容を教授する際に学習の質を担保するためにそれぞれの教員が工夫していることが明らかになったが、一方では、単純に語学のレベルでは解決できない課題があることもわかった。日本語母語話者の授業への積極的な参加に関して多くの教員が課題を感じていたことがわかった。今後は EMI 授業においてどのようにアクティブ・ラーニングを実現することができるかについてより深く掘り下げる必要があることがわかった。

また、その後、8 名の教員を対象にインタビューを行った。コロナ禍での実施だったため、オンライン授業への緊急対応についての内容が主流となったが、多くの興味深い洞察が得られた。質的な分析手法によるコーディングを経て、以下の点が明らかになった。EMI の教員にとって「教授言語」よりも「教科の教授」がアイデンティティーの要因として大きく作用している。また、教師の主体性、が教師アイデンティティーの研究では顕著な概念として取り上げられているが、コロナ禍において、さまざまなレベルの主体性が見られ、周囲との協調性を重んじた場面对応も良い例としても見られた。文化的な背景を考慮すると、教師アイデンティティーをより柔軟に捉える必要があるのではないかと、ということが示唆された。

(3) まだ分析途中ではあるが、高校生が英語で文学作品を読み、作品に描かれていたモラル・ジレンマについて検討した。第二言語で学習することでエンゲージメントが下がるという懸念もあったが、個人にとって意味のある内容に触れることで英語でもエンゲージメントがあったことが示唆された。EMI において教材選びが重要だということが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Fujii, Akiko, Komatsu, Maki, Fradale, Paul	4. 巻 63
2. 論文標題 The development of preservice teachers' cognition about IB education: An exploratory case study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Educational Studies	6. 最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miyahara, M.	4. 巻 1
2. 論文標題 Methodological Diversity in Emotion Research: Reflexivity and Identities	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal for the Psychology of Language Learning	6. 最初と最後の頁 83-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 宮原万寿子	4. 巻 67
2. 論文標題 学習者のナラティブから見られる変遷：「言語学習者」から「言語使用者」へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮原万寿子	4. 巻 25
2. 論文標題 グローバル人材を育てるICUにおける英語教育：カリキュラムと教材の視点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masuko Miyahara, Patrick Kiernan, Chika Hayashi	4. 巻 2
2. 論文標題 Qualitative Research and Learner Development	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Learner Development Journal	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺敦子、岩田裕子、宮原万寿子	4. 巻 8
2. 論文標題 大学と大学院の連携による教員養成モデル：教師教育社、教員、学生三者の発達を目指して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JACET言語教師認知研究会研究集録	6. 最初と最後の頁 54-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Fujii, A. & Miyahara, M.
2. 発表標題 Instructional Practices and Identities in the English Medium Instruction (EMI) Classroom
3. 学会等名 JACET Kanto
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Akiko Fujii, Noriko Ito, Ella Lee, Hisako Fukumoto, Ai Suzuki,
2. 発表標題 Supporting academic reading in English Medium Instruction: Perceptions of graduate tutors and undergraduate participants
3. 学会等名 JACET Convention 2019
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 宮原万寿子
2. 発表標題 言語教育におけるナラティブ分析
3. 学会等名 JACET 月例研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 宮原万寿子
2. 発表標題 グローバル人材を育てるICUにおける英語教育：カリキュラムと教材の視点から
3. 学会等名 国際教育研究所 例会 (招待講演)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Masuko Miyahara
2. 発表標題 Using Narratives in Identity Research: Attempts to Develop a Reflexive Framework
3. 学会等名 Institute of Education, University College London (招待講演)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Masuko Miyahara, Akiko Fukao
2. 発表標題 Transformative Power of Collaborative Autoethnography in Language Learning Research
3. 学会等名 The 54th RELC International Conference, Singapore (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Akiko Fujii, Ryo Yoshida, Hisagi Kanako, Yuki Nishino
2. 発表標題 The role of pre-service teachers in facilitating task-based learning in extra-curricular English workshops.
3. 学会等名 4th JACET Joint Seminar
4. 発表年 2022年～2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Kumiko Murata (Ed.), Henry Widdowson, Barbara Seidlhofer, Alessia Cogo, Anna Mauranen, Sayoko Maswana, Marie-Luise Pitzl, Lixun Wang, Ying Wang, Jagdish Kaur, Kaisa Pietikainen, Alan Thompson, Masuko Miyahara, Yoko Nogami, Tomokazu Ishikawa	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 19
3. 書名 'Place-reflexivity' as an imaginary kaleidoscope to explore methodological issues in ELF research' In ELF Research Methods and Approaches to Data and Analyses	

1. 著者名 青木直子（編集）、バーデルスキー・マシュー（編集）、リー・ウェイ、義永美央子、西口光一、マーリー・ギャロル度、宇塚万里子、難波康治、カーティス・ケリー、宮原万寿子、八木真奈美、入江恵、柴原千佳、クラムシュ・クレア他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 日本語教育の新しい地図（第6章「ソーシャル ターン(social turn)が英語教育にもたらす課題」）	

1. 著者名 Miyahara, M. (J. McKinley & H. Rose (eds))	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 10
3. 書名 The Routledge Handbook of Research Methods in Applied Linguistics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮原 万寿子 (Miyahara Masuko) (00453556)	国際基督教大学・教養学部・講師 (32615)	
研究分担者	森島 泰則 (Morishima Yasunori) (20365521)	国際基督教大学・教養学部・教授 (32615)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
Teaching in English in Multilingual Higher Education Contexts: Dialogue and Professional Development	2019年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関